

大人の味というのだろうか、ミョウカは
いかがでしょう。花は清楚できれいだ
が、茗荷の林の中に隠れて咲くのであまり
知られていないかも。ただし花が咲くと、
食べられる部分はスカスカになってしま
う。小岩に
いる時、随分食べたが、その影響なの
かな、この頃忘れっぽい。

自立出来ないが、名前がよく知られて
いるのはナスナ。春の七草の一つ。

よくみれば必ず花さく垣根かな
という句は、市川学園の建学者が教育の
理念として話や文章にしばしば引用した。

市川学園同窓会誌の誌名を「なすな」と
した時、こっちが先だと自慢したのはバス
ケットボール部OB会を「なすな会」と名
づけた番長S。Sの武勇伝はあとで。

さんちもくせいのがほり

花の香りを愛でる習慣はないが、すぐ思
い出すのはキンモクセイ。

高校の時、珍しく早く下校することがあ
って、Sと隣り合った時、匂いがした。汗
か、と思った。頭の上でキンモクセイが満
開だった。それ以来花が見えなくても、鼻
でわかるようになった。

市川市立図書館で若い女性何人かと一緒
に働くことがあって、その一人とすれ違っ
た時に覚えのある香りを感じた。この時も
汗か、と一瞬思ったが、あのキンモクセイ
だと訂正した。そういう香りの香水がある
のだろうか。イさんやカさんが、歯科技工
士の勉強の実習台に頼まれて、血だらけに
された〜と喜んでるのを見て羨ましいとい
うことがあったが、あの女性です。

高校を卒業して勤め始めた頃に、風邪が
なと家の近くに開店して間もない薬屋に入

った時のこと。出てきた人はお出かけ前ら
しい和服の女性で、いい匂いがした。爪が
桜貝色なのと合わせて今でも忘れない。上
品な香りに感じた。植物系というのだろう
か。満員電車で女性のおそば近くになるこ
ともあったが、やたら強かったりけものじ
みていたりで、薬屋さんのお姉さんの香り
には二度と遭遇することなくこんにちに至
った。

カメムシの木

イさん、浜町にはカメムシがいっぱい居
ますヨ。よく見つかるところの一つが、住まい
の隣りブロックの駐車場の隅の花木。ラン
タナ。冬になりすっきり枯れた。枯死した
のかと思った。枝が切り落とされた。これ
で虫終わらさうと思っていたら、花が
咲き、カメムシの子どもが現れた。抜け殻
もこの木で見つけた。幼虫も成虫も抜け殻
もみつかるならば、卵があるに違いないと
推理。この冬は、通りかかるたびに枯れ木
の間を覗く。

町を歩くときれいな花に出会う。なんと
いう名前だろうかと図鑑を開くが、さっぱ
り分からん。ランタナはタウン誌だったか
で、偶然見かけて知ることができた。



ランタナ (くまづ
ら科)
浜町のあちこちで咲
く
2019/06/28、浜町の
薬屋車庫



平成最後の桜

最初だとか最後だと聞くと、なんとなく特別な
気がする。桜も毎年咲くけれどもそう言われる
と写しておきたくなる。

長い戦争で身も心もぼろぼろになって帰る船か
ら、近づく日本を見ていた双眼鏡が花を捉えた。
さくらだら 双眼鏡を奪い合うように皆が見た。
皆泣いていた。

川津桜が満開の日、マシヨシ三階の通路や階段
に梅の花びらが散っていた。白梅が向かいの家で咲
いている。かつて日本人にとって花と言えば梅で
あったという。桜が日本人の心の花になつたのはそ
う古いことではないらしい。

花にカメラを向けることはめつたない。小学校
の同級生ヨシちゃん、入院が長くなった母のため
にと、カラーボジで写して病室でスライド映写会
を開き、ほかの皆さんにも喜ばれたという。そう
いう使い方もあるのかと感心した。

上写真は、浜町の多分マシヨシ。平成三十
一年四月一日撮影。翌月一日令和と改元。九月私
は八十となる。

さくらのか

教室に入るといい香りがした。教卓にサクラの枝が置かれていた。強くなく弱くなく、品よく香っていた。サクラがこんなに香るとは知らなかった。前の時間に、誰かサクラの花をもってきてくれたのか、と頼んでおいたのだ。花を分解して観察し、スケッチするのだ。

1メートルほどの枝にちょうど開いたばかりというサクラの花がとっさり。こんな立派な枝を切ってしまうっていいのだろうか、と心配になった。

中学生になって直後の理科II(生物、地学)の授業で、この年のサクラは入学式には間に合わなかったが、授業にはちょうどよかったわけだ。

サクラという入学式と結びつくが、市川中学校で二十数回経験した入学式で、サクラに取り囲まれたのは確か1回だけだった。後はまたつぼみだ。すでに散ってしまったということもあった気がする。

下等真はその頃の私が担任したクラスの子たち。まだ花ならつぼみ。まもなくワルガキの本性をあらわしてきて手にも負えなくなる。夏休みを過ぎるとぐんと大人になっ



春のかんばせ 1年3組の諸君 1969年 ころ

陰翳礼讃

サクラで思いだすのは、タさんのお友達と軽井沢方面にドライブした時に朝早く訪れた小諸城址。盆地のように低まったところでも朝もやに包まれてほの白く見えた。真白ではない。わずかにピンクを加えた力ンジ、とでもいえばいいのだろうか。薄い紗の向うで湿っていた。こういうのを日本の風土というのだろうか。日本人の心の陰翳のもともというのだろうか。

あさがおボン

小学生の時にアサガオの咲くのを観察した。朝早く起きて咲きそうなるつぼみを探らみつけた。ゆっくりと、目で見てわかる程の早さで動いた。やがてすするとねじれがほけてボンと開いた。さらに開いて完全開花。ボンと着がしたと記憶にあるが本当にそうだったのだろうか。

今ならスマホで逐一記録するところだろうが、レポートにして提出したような見ただけだったような。

レポートを提出した記憶では、冬、水が氷るところを観察したことがある。小岩の撃たったから中学生1年生の時だろう。パークツに水をはって廊下兼縁側のすぐ外において水面をならむ。寒い。部屋に戻って布団にもぐりこんで待つ。下の兄に、凍り始めた、と起こされた。眠気が覚めてパークツの中を懐中電灯で照らす。水面に霜柱を大きくしたようなものが出来ていた。これが水の始まりか。見ていると霜柱状態が増え、とそう簡単にはいかなくなったが、ある程度の進行を観察出来て、こちらが氷りかけたので撤退。この一件は冬休みの自由研究として提出した。

下の兄は、部屋の隅で徹夜の受験勉強をしながら、寝てしまった弟の代わりに時々バケツを覗いてくれたのだ。かなり進行したが兄が判明した時、ヒトはどのような生き方をしたかが大切だといって、強い薬は拒否し、骨は希望通り小網代湾に散った。奥さんは9か月後にあとを追った。

華道つじ流

高校生の時、学級費で黒板の枠に花を飾った。真持ちするのでキクを挿すことが多かった。水を足すのを忘れていて、それにしては随分持ち直すなど花びらに触ったらバリバリに乾燥していた。花瓶はタケ。なにも小網工していないのを探したが無い。作ろうとしたが、意外に厄介なのであきらめた。作るより前に手ごろなタケ探しに苦労した。挿すのは1輪。これがつじ流。図書館職員になってカウンスターや事務室に花を置くことがあったが、この時も1輪かせいぜい2輪。同僚の女性は不満のようであつた。カウンスターには、校舎の周りで見つけたいわゆる野の花を置くことが多かった。この時も1輪。根ごと小さい鉢に移すこともあった。

図書館長の何かのお祝いの席が図書館職員中心で設けられた。こういう場合には花束が用意されるなと思い、1輪贈呈した。女性陣が懐立だった。宴半ば、女性代表から立派な花束が捧げられた。一回あらためてやんやの喝采となった。

当時、男は花を持ち歩くのに慣れていなかった。帰宅の総武線の中で中年の男性が困った風情で花束を持っているのを見ていたので、1輪ならカバンに仕舞いこめると考えたのだ。もらった立派な花束はどうするのだろうか。持って帰って家族で喜びを

分かち合おうということだろう。同席の皆さんに配るというテモ有るらしい。皆と別れたらこそそりゴミ箱にいれるなんてことをしてはいけないインだろう。

そういえば近ごろ、駅でゴミ箱を見つけてるのが必ずかしい。

タイサンボクのようなきまみなりき

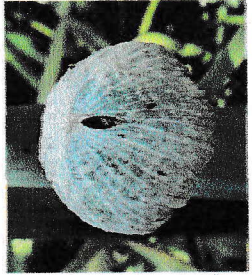
好き嫌いがはっきりしない性格の私だが、好印象の花というのには有る。タイサンボクもその一つ。大きくて存在感がある。といってポタンほど自己主張が大きいところが好き。近くの家にあって見上げる程度にしか観察してないが、いつの間にか見られなくなった。

君はタイサンボクのような、なんて言うてみたい人がいたが、まさかそんな歯の浮くようなことは言えずに、その人は存在しなくなつた。

タイサンボクは大きくて立派だが、ニラの花とかユキノシタの花もいいモンだ。

ニラでは、花ではないがご飯に刻んで混ぜ込まれたことがあって、これにはまいてい。まだニラの味がわかる大人になつていなかったから。

ユキノシタは、葉を天ぷらにすると美味である、と読んで本当に試してみた。まずくはないが美味と感じるにはやはり人生経験が不足していたようだ。



朝の風・ネギの花
ネギボウズ
浜町公園 2018/4/18